

# 幼児期記憶とその連想記憶における想起視点

森 田 健 一

## 問題

### 1. はじめに

自伝的記憶とは、「個人が人生の中で体験したさまざまな出来事に関する記憶の総体」のことであり、特に認知心理学の分野において熱心に研究され、研究成果もこの25年間で急速に蓄積されてきた（佐藤・野村・遠藤・太田・越智・下島，2006）。この自伝的記憶の中でも、特に幼児期記憶は、心理臨床の場面においてクライアントを理解するためのひとつの手がかりとして注目されており（たとえば山中，2001）、古くから心理臨床家によって心理臨床実践に基づいた様々な研究がなされている。

たとえば、「ライフスタイル」という概念を用いて、幼児期記憶がその個人の性格特性や行動傾向のもっとも凝縮された経験であると論じたAdler（1932）や、幼児期の経験と成長してからの傾向との間に因果関係があるとして、幼児期からの自叙伝を書かせて分析を行ったMurray（1938）、幼児期の出来事として想起される記憶は一見無意味な出来事に見えることが多いが、それらは抑圧を中心とする防衛機制の結果生じた性的経験や幻想などを覆い隠した隠蔽記憶であるとしたFreud（1899/1970）などが挙げられる。

Adler（1932）は、「偶然に想起された記憶などというものはなく、それらは現在に関心のある出来事を選択し選ばれたものである」として想起された出来事自体を重要視したのに対して、Freud（1899/1970）は「その想起された幼児期記憶はあくまでも隠蔽記憶であり、その記憶から連想を用いた分析をすることによって本当に重要な記憶に至り、問題の核心に迫ることが出来る」として、最初に想起された記憶はあくまでも手がかりであってそれ自体を最重視するわけではなかった。Freud（1899/1970）は、想起された幼児期記憶が隠蔽記憶である証拠として、それらはほとんどの場合、「当時の視点から想起されるのではなく、自分の姿も含む外側から眺める視点で想起される」ということを事実として挙げ、それらは全て「抑圧や置き換えのために何らかの加工を受けて再構成化されたものである」とした。確かに我々は日常生活において、世界を自分自身の視点から体験しており、当然のことながらそこには客観的な自分の姿は映されていない。にもかかわらず、過去の記憶を想起する際にはその情景の中に自分の姿を含めた形で想起されることがある。もちろん、逆に自分自身の視点から想起されることもある。

なぜこのような違いが生じるのであろうか。それぞれの視点にはどのような違いがあるのであろうか。本論文はこのような「想起視点とはいかなる意味を持つのか」という問題意識に基づいている。

## 2. 自伝的記憶における視点

想起された自伝的記憶における視点に関して、これまでに少数ながらいくつかの研究が行われてきており、以下簡単に紹介する。

Nigro & Neisser (1983) は、「外側から客観的な視点で想起される出来事」と、「体験した当時と同じ自分自身の視点から想起される出来事」が存在するという調査によって実証的に確認した（以下、それぞれの視点を"外的視点"と"内的視点"とする）。そして、外的視点で想起される出来事は自己意識をとまなう出来事に多く、客観的状况に焦点を当てて想起した際に多く想起されるとし、内的視点で想起される出来事は、感情に焦点を当てて想起した際や最近の出来事を想起した際に多いとした。

杉浦 (1996) は、この中の自己意識の側面に注目し、調査者が設定した33状況を被験者にイメージさせ、自己意識を高く伴う状況（例：みんなの前で先生に怒られている）とそうでない状況（例：自宅でお風呂に入っている）で、外的視点イメージと内的視点イメージのいずれが優勢であるかを調べた。結果、自己意識を高く伴う場合に外的視点でイメージされることが多いということ述べた。

McIsaac & Eich (2004) はPTSD患者に対して、トラウマ体験を想起した際の視点に注目した。被験者が内的視点で想起した際には、その出来事を自分自身であったかも再体験するかのようになり想起し、トラウマ体験時に被験者が体験した感情的な反応や身体感覚、心理状態を多く報告した。一方で、外的視点で想起した際にはその出来事とは一線を隔てた観客のような視点から想起し、被験者の当時の外見や行動、トラウマ体験時の光景の空間的配置を多く報告したという。

## 3. 問題提起

このように、想起された自伝的記憶における視点に注目した研究はいくつか見られるが、Freud (1899/1970) によって論じられたような"幼児期記憶における視点"に焦点をあてたものは見られない。Freud(1899/1970)は自身の臨床経験から幼児期記憶の視点について述べており、「われわれの幼児期記憶」という表現でそれを一般化しているが、健常者を対象とした実証的なデータは提示していない。それゆえ本研究では、実際に幼児期記憶がどのような視点で想起されるのかを、実証的に検討したい。そして、幼児期記憶における視点がどのような意味を持つのか、という点に関して検討するため、各視点で想起された記憶について、尺度を用いて数量的に比較したい。

またFreud (1899/1970) は、連想を用いることによって重要な記憶にいたるとしているが、このとき視点については言及していない。また、記憶の連想に関してその想起視点に着目した先行研究も他にも見られない。そこで本研究では、連想において視点がどのように現れ出るのかという点にも着目したい。このことで、上記の数量的比較検討とは別の観点からの想起視点に関する知見が得られ、また心理臨床場面において連想を用いることの意義を新たな視点から捉えることができる、と考えられるからである。

## 目的

以上のような問題意識に基づき、本研究では幼児期記憶を想起する際の視点に関して、大きく分けて以下の2つの側面に注目する。

1. 幼児期記憶を想起する際の視点と、それぞれの視点の記憶の特性について。
2. 想起された幼児期記憶から他の記憶を連想するときの視点の変化、および特徴について。

## 方法

### 質問紙の作成

想起された記憶内容を視点ごとに比較するための評定項目を作成するために、2004年7月上旬から7月下旬にかけて質問紙による予備調査を行った（調査対象者は96名であった）。質問項目のうち、「幼児期にあなたが体験した出来事を思い出してください。そして最初に思い出した出来事を思い出せる範囲でなるべく具体的に記述してください」という自由記述の項目に注目し、心理学を専攻する大学生2名と合議の上、「楽しい」「おそろしい」など記述内容から連想された形容語を抽出した。その後、それらの形容語を用いて作成した質問紙を用いて50名を対象に予備調査を行い、回収データに因子分析処理を行って、本調査で用いる30項目からなる幼児期記憶評定尺度を完成させた。

### 調査協力者

京都市内の4年制大学に通う116名の大学生（男性57名、女性59名）を対象に質問紙調査を行った。平均年齢は21.22歳（SD=2.46）であった。

### 実施方法

大学構内で質問紙を配布し、後日指定のポストに入れてもらう形式をとった。調査は2004年11月上旬から11月下旬にかけて実施された。

### 質問紙の内容

（1）**幼児期の定義**・・・「あなたにとって幼児期とはだいたい、いつからいつ頃までですか？」という質問を最初に行い、回答者それぞれにとっての幼児期を定義してもらった<sup>注</sup>）。

（2）**幼児期記憶**・・・「その幼児期にあなたが体験した出来事を思い出してください。そして、そのころの出来事で、あなたが今、最初に頭に浮かんだ出来事を思い出せる範囲でなるべく具体的に記述してください」という教示のもと、幼児期記憶を自由記述してもらった。このとき、「いつ」「どこで」「誰と」という3つのポイントについても、別の欄に明確化してもらった。

（3）**視点**・・・「（2）の出来事はどのような視点で思い出されていますか？あてはまるところにチェックしてください」という教示のもと、視点を特定してもらった。外的視点は「観察者の視点から見ており、その光景の中に自分も含まれている」とし、内的視点は「当時と同じように自分の視点から見ており、その光景に自分は含まれていない」とした。また、いずれでもない場

合はどのような視点でその出来事を想起しているのかを記述してもらった。

(4) **幼児期記憶の評定**・・・想起された幼児期記憶に関して、30項目からなる評定尺度を"非常にあてはまる", "割と当てはまる", "どちらともいえない", "あまりあてはまらない", "全くあてはまらない", の5件法で評定してもらった。

(5) **幼児期記憶からの連想**・・・「(2)の出来事から連想する出来事を思い出してください。そしてあなたが今、最初に頭に浮かんだ出来事を思い出せる範囲でなるべく具体的に記述してください。なお、この出来事は幼児期である必要はありませんし、どう連想しているのかわからなくてもかまいません」いう教示のもと、別の記憶を連想してもらった。そして、幼児期記憶と同様に"視点"と"尺度"を回答してもらった。

## 結果

以下、(2)で想起してもらった記憶を「1つ目の記憶」、(5)で連想してもらった記憶を「連想記憶」と表記する。

全被験者において、幼児期の定義が合致しており、また記述された記憶内容が幼児期のものであることが示されていたため、分析は116名すべてのデータを用いた。なお、視点に関して、「いずれでもない」とされたものがあつた(1つ目の記憶では6名、連想記憶では8名)。本研究において、「内的視点」を「当時の自分と同じ位置から情景を想起する視点」、「外的視点」を「当時の自分とは違った位置から見たものを含めて想起する視点」と定義し、記述内容をもとに心理学を専攻する大学生2名と合議の上で検討した結果、全ていづれかに分類することができたため、データを除外せずに以下の分析を進めた。

評定尺度の評定値に関して、「非常にあてはまる」を5点、「全くあてはまらない」を1点としてそれぞれの項目について得点化した。そして、得られたデータを用いて因子分析(主因子法、固有値1以上の基準により因子数を決定、プロマックス回転)を行った。ただし、各項目のうち、因子負荷が0.35に満たなかった2項目(「自分らしい」・「客観的な出来事のように感じる»)を除外し、再度、同様の手順で因子分析を行った。因子数は、固有値1以上の基準から、6因子となった。プロマックス回転を行った結果の因子パターンをTable 1に示した。

第1因子では、「幸せな」、「ゆかいな」など、快感情を伴う項目が含まれており、「快感情因子」と名づけた。第2因子では、「はずかしい」、「くやしい」、など、不快感情を伴う項目が含まれており、「不快感情因子」と名づけた。第3因子では、「こわい」、「恐ろしい」、など恐怖感情を伴う項目が含まれており、「恐怖感情因子」と名づけた。第4因子では、「せつない」、「さみしい」など、感傷感情を伴う項目が含まれており、「感傷感情因子」と名づけた。第5因子では、「他人が聞いて重要である」、「価値のある」、など、重要性に関する項目が含まれており、「重要性因子」と名づけた。第6因子では、「当時の感情をはっきり思い出せる」、「鮮明に覚えている」など鮮明性に関する項目が含まれており、「鮮明性因子」と名づけた。

Table 1  
各質問項目（2項目を省いた）における因子負荷量

項目（提示順序）	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	共通性
	快感因子	不快感情因子	恐怖感情因子	感傷感情因子	重要性因子	鮮明性因子	
幸せな(12)	.94	-.04	-.05	.16	-.07	-.06	.48
ゆかいな(24)	.90	.26	-.02	-.26	.00	.11	.77
うれしい(28)	.89	-.06	.07	.09	.07	-.04	.65
おもしろい(2)	.88	.18	.05	-.27	.07	.11	.84
たのしい(4)	.84	-.12	.08	-.12	-.05	.04	.63
明るい(22)	.84	.17	-.20	.01	-.03	-.05	.56
心地よい(11)	.80	-.12	-.12	.22	-.06	-.02	.65
きれいな(19)	.67	-.18	.00	.41	.06	-.03	.83
もう一度したい(15)	.60	-.09	-.12	.25	.17	-.02	.93
ほこらしい(25)	.46	-.01	.05	.02	.39	-.05	.40
はずかしい(30)	.16	.93	-.09	-.13	.04	-.11	.81
くやしい(13)	-.05	.72	-.17	.13	.01	-.01	.89
残念な(5)	-.23	.67	-.16	.14	.12	-.01	.49
みじめな(26)	.13	.62	.24	.32	-.17	.05	.55
嫌な(29)	-.11	.55	.27	.12	-.01	.05	.60
つらい(8)	-.23	.45	.27	.19	.07	-.03	.78
こわい(9)	-.05	-.17	.99	.16	-.03	-.02	.25
恐ろしい(16)	-.16	-.11	.85	.01	.08	.02	.61
びっくりした(10)	-.03	.30	.40	-.24	.14	.11	.61
せつない(21)	-.25	.16	-.32	.65	.04	.10	.73
さみしい(3)	-.33	.01	.09	.57	.10	-.09	.37
頼りたい(18)	.34	-.03	.22	.50	-.04	-.09	.74
悲しい(27)	-.24	.26	.19	.47	-.06	.12	.46
他人が聞いて重要である(14)	-.06	.28	.16	-.10	.78	-.17	.84
価値のある(7)	.14	-.08	-.16	.03	.65	.12	.91
今の自分にとって重要である(23)	.08	-.21	.08	.20	.42	.22	.82
当時の感情をはっきり思い出せる(6)	.05	.12	-.03	-.06	-.11	.74	.83
鮮明に覚えている(1)	-.01	-.24	.08	-.04	.12	.69	.50
固有値	12.33	2.71	1.83	1.39	1.31	1.19	20.76
因子寄与率(%)	44.03	9.67	6.52	4.97	4.69	4.25	74.14

注 太字は因子負荷量.40以上を表す

## 1. 1つ目の記憶に関して

### 1. 1. 幼児期記憶における視点

1つ目の記憶において、外的視点で想起した人は73名、内的視点は43名であった。 $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意に外的視点で想起した人が多かった ( $\chi^2(1)=7.76, p < .01$ )。

1. 2. 視点による評定値の差

抽出された6因子それぞれに該当する質問項目の点数を合計して因子ごとの得点を出し、それぞれの因子について、視点の1要因分散分析を行った。結果、"快感情因子"において視点の主効果があり、有意に外的視点が高かった ( $F(1,114)=4.83, p<.05$ )。"不快感情因子"における視点の主効果は有意傾向で、内的視点が高かった ( $F(1,114)=3.25, p<.08$ )。恐怖感情因子、鮮明性因子においては、F値は高かったものの有意差は見られなかった ( $F(1,114)=2.49, n.s.$ ;  $F(1,114)=2.61, n.s.$ ) (Table 2)。

Table 2

1つ目の記憶における各因子の視点ごとの平均値およびSD

因子名	外的視点		内的視点	
	平均値	SD	平均値	SD
快感情	2.80	1.38	2.38	1.41
不快感情	2.01	1.26	2.39	1.47
恐怖感情	2.01	1.34	2.40	1.45
感傷感情	2.31	1.35	2.35	1.40
重要性	2.39	1.29	2.52	1.13
鮮明性	3.07	1.18	3.35	1.21

視点における想起内容の違いをより詳細に検討するため、尺度項目ごとに同様の分散分析を行った結果、"心地よい"・"客観的な出来事のように感じる"においては外的視点が有意に高く、"鮮明に覚えている"・"恐ろしい"・"嫌な"においては内的視点が有意に高かった ( $F(1,114)=4.36, p<.05$ ;  $F=16.28, p<.01$ ;  $F=4.58, p<.05$ ;  $F=5.78, p<.05$ ;  $F=4.47, p<.05$ )。

2. 連想による視点の変化に関して

2. 1. 連想記憶における視点

連想記憶において、外的視点で想起した人は57名、内的視点は59名であった。記憶(1つ目の記憶・連想記憶)×視点(外的視点・内的視点)のクロス表を作成し、 $\chi^2$ 検定を行ったところ有意な連関が見られ ( $\chi^2(1)=4.48, p<.05$ )、残差分析(5%水準)の結果、有意に1つ目の記憶において外的視点多くて内的視点が少なく、連想記憶において外的視点が少なくても内的視点多かった (Table 3)。

Table 3

それぞれの記憶における視点の人数

		視点		合計
		外的視点	内的視点	
記憶	一つ目	73▲	43▽	116
	連想	57▽	59▲	116
合計		130	102	232

▲は有意に多い

▽は有意に少ない

2. 2. 連想による視点の変化

次に、1つ目の記憶から連想記憶への連想において、各視点がどのように変化したのかを検討したところ、Table 4のような結果になった。各視点の変化について、クロス表を作成して $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な連関が見られた ( $\chi^2(1)= 12.32, p < .01$ )。残差分析の結果 (1%水準)、有意に"外的視点から外的視点"および"内的視点から内的視点"が多く、"外的視点から内的視点"および"内的視点から外的視点"が少なかった。

Table 4  
1つ目の記憶から連想記憶への視点の変化

		視点 (連想)		合計
		外的視点	内的視点	
視点 (1つ目)	外的視点	45▲	28▽	73
	内的視点	12▽	31▲	43
合計		57	59	116

▲は有意に多い  
▽は有意に少ない

2. 3. 連想された時期

最後に、1つ目の記憶から連想記憶を連想する際の"連想パターン" ("外的視点から外的視点" "外的視点から内的視点"など) と連想記憶で想起された出来事の"時期"との関連をみたところ、Table 5のような結果になった。クロス表を作成して $\chi^2$ 検定を行ったところ有意な連関が見られた ( $\chi^2(9)= 18.04, p < .05$ )。残差分析を行ったところ (5%水準)、"外的視点から外的視点"において幼児期の出来事を連想した人が多く、"内的視点から内的視点"において小学生期の出来事を連想した人が多く、中高生期の出来事を連想した人は少なかった。また、"内的視点から外的視点"・"外的視点から内的視点"ともに中高生期の出来事を連想した人が有意傾向で多かった。

Table 5  
各連想パターンにおいて連想された時期の人数

		時期				合計
		幼児期	小学生期	中高生期	大学生期	
連想パターン	外→外	32▲	6	3	4	45
	外→内	13	5	5(▲)	5	28
	内→外	5	2	3(▲)	2	12
	内→内	18	10▲	0▽	3	31
合計		68	23	11	14	116

▲は有意に多い, (▲)は有意傾向に多い  
▽は有意に少ない

## 考察

### 1. 1つ目の記憶に関して

Freud (1899/1970) は、幼児期の出来事は外側から自分の姿を眺めるように想起するのが普通である、としたが、本研究においても外的視点で想起された記憶が有意に多かった。全被験者が外的視点で想起したわけではないため、Freudの説を完全に支持した結果であるとはいえないが、それでも有意に多かったということは興味深い。これは、抑圧や置き換えによって生じた記憶の再構成である、といったFreud (1899/1970) のような解釈も出来るかもしれないが、別の解釈として、幼児期の出来事はもはや"自分の体験した出来事"として当時のまま想起されることは難しく、それゆえ断片的に記憶しているイメージを、家族からの情報や写真を手がかりに膨らませて作り上げられた(すなわち"再構成された")からだ、という解釈も出来るだろう。記憶というものは外部ソースからの情報によって構成されている、ということによく言われているが(例えば森, 2002)、外側から自分の姿を見るような客観的な視点で想起されているのは、そのような"客観的手がかり"から出来事を"捉え直した"結果であると考えられる。本調査における、外的視点で想起された記憶の方が"客観的に感じる"という項目が有意に高かったという結果が一つの根拠となろう。

一方で、当時見た情景を当時のまま想起できるような記憶は、多少の変化は当然考えられるであろうが、体験当時の視点のまま想起されたと本人が感じているのであり、視点が変化するような"再構成"はなされなかったといえる。これは、本人にとってはそのくらいの印象深い出来事であったからである、という解釈も可能かもしれない。その根拠として、内的視点で想起された出来事は、外的視点と比べ相対的に、不快感情・恐怖感情を強く伴い、しかも鮮明に覚えている、という結果が挙げられる。確かに、"嫌な"出来事や、"恐ろしい"出来事は、その本人にとって印象深いものであり、場合によってはPTSDにおいて見られるような心の傷にさえなることがある。大矢(1999)は、感情を伴った衝撃的な出来事、個人的な意味を持つ出来事ほど正確に鮮明に記憶される、と論じているが、そのような出来事は、他の記憶と同様に再構成された形で想起されるのではなく、当時の印象のまま想起されるのかもしれない。また、幼児期記憶を想起するパターンによって4群に分けて比較検討を行った林(2005)は、最も鮮明に想起した群の全員が、自分の視点から幼児期記憶を想起したという結果を示しており、本結果と類似性が見られる。なお、これらの結果は、PTSD患者において、トラウマ体験を内的視点で想起した場合には、"あたかもその出来事を再体験している"ように想起され、外的視点で想起した場合は客観的な光景(自身の外見、行動、光景の空間的配置)をよく想起し、内的視点と比べ、少ない情動性・少ない不安喚起を伴うことを発表した、McIsaac & Eich (2004)の研究結果と同様のものであった。

### 2. 連想による視点の変化に関して

1つ目の記憶から連想記憶を連想することで、内的視点で想起される割合の増加が見られた。これを評定値の結果に基づいて解釈すると、「自分にとって"客観的な"出来事から、"鮮明に覚えている(="印象深い"とも言えるだろう)"出来事へと連想された」と考えられ、また「"心地よい"出来事から、"恐ろしく嫌な"出来事へと連想された」とも考えられ、興味深い結果となった。



Freud (1899/1970) は、最初に想起された幼児期記憶から連想することで抑圧された本当に重要な記憶に至る、とした。今回は治療構造内での自由連想によって導かれた結果でなく、抑圧された記憶へと連想されたとも安易には断言できないが、それでも連想によって個人にとってより印象深い出来事を想起されたと考えられたことは、心理臨床場面において連想を用いることの意義が垣間見られたといえるであろう。

一方、両方の視点とともに内的視点での出来事を連想する傾向にあったわけではなかった、ということも興味深い。外的視点で想起された出来事からは外的視点で想起される出来事を連想し、内的視点で想起された出来事からは内的視点で想起される出来事を連想する場合が有意に多かった。ここから、連想のメカニズムについて一つの仮説が考えられるだろう。すなわち、外的視点で想起しているときは客観的に自分自身の姿を頭の中に思い浮かべているのであり、連想する際にもその姿を手がかりに連想した、と考えられる。逆に、内的視点で想起している際には、頭の中ではその頃の出来事を"あたかも再体験する (McIsaac & Eich, 2004) "状態であり、つまり当時の自分に"成りきって"おり、連想する際にもその自分から他の出来事へと"記憶を順向(過去から現在)の向きでたどる"ため、自分自身の視点のまま次の出来事に行き着いたのかもしれない。これらの根拠として、1つ目の記憶から連想記憶に連想する際、外的視点から外的視点へと連想した際には幼児期の出来事が多く想起され、内的視点から内的視点へと連想した際には小学生期の出来事がそれぞれ有意に多く想起された、という結果が挙げられる。すなわち、外的視点で1つ目の出来事を想起しているときは幼児期の自分を頭に浮かべているため、連想する際もその幼児期の自分の姿を手がかりに連想したため幼児期の出来事を思い出し、内的視点で1つ目の記憶を想起しているときは、その幼児期の体験を"再体験"しており、そこから連想する際には、当時の自分から時代を順に経てゆき、似たようなシチュエーションに行き着こうとし、最も時間的距離の近い小学生期の出来事に行き着いた、と考えられないだろうか。このように考えた場合、外的視点で想起された記憶を内的視点でイメージし直したとき、内的視点での記憶が連想されやすくなる、と考えられる。仮に、Freud (1899/1970) がいうように、内的視点で想起される記憶が重要な記憶である、とするならば、外的記憶で想起された記憶を内的視点でイメージし直してもらって、そこから連想してもらおう、という方法論は検討に値するものではないだろうか。ただし、この方法は非常に侵入的な操作になりうるため、臨床場面においても調査研究においても安易には決して行われるべきではなく、十分な臨床的配慮が行われた状況でのみ検討されるべきである。

## まとめ

本研究では、想起された自伝的記憶における視点に関していくつかのことが示唆された。

まず、幼児期記憶においては、Freud (1899/1970) が述べたように、客観的に自分の姿を見ようとする外側の視点から想起される記憶が有意に多いということがわかった。そして、各視点での評定値をもとに考察した結果、内的視点で想起された出来事は、客観的想起が多い幼児期の出来事なのに当時のままの印象で想起されるくらい、強烈な印象を残すものであると考えることができ、外的視点で想起される出来事と比べ"鮮明"で"恐ろしく"、さらに"嫌な"出来事である、ということがわかった。

そして、連想を行う際、外的視点で想起された出来事からは外的視点での出来事を連想しやすく、内的視点で想起された出来事からは内的視点での出来事を連想しやすいということがわかった。特に幼児期記憶から連想する場合には、前者は主に幼児期、後者は主に小学生期の出来事を連想しやすいということがわかった。自伝的記憶の相互の結びつきに関する研究はこれまでになされているが（例えば佐藤，2002），視点という観点から検討されたことはなく，この結果によって新しい視野が開けたといえるだろう。

## 今後の課題，および展望

### 今後の課題

本研究では，想起された視点を"外的視点"/"内的視点"という二分類にして検討することで幾つかの知見が得られたが，「いずれでもない」として一方のみの視点から想起しなかった被験者もあり，必ずしもいずれかの視点に分類しきれぬものでもない，ということも本研究を通して示唆された。幼児期記憶は断片的なものや不完全なものも多いと言われることがあり（森，2003），また自伝的記憶における視点に関する研究はその結果の安定性を欠いているという指摘（越智，2003）もみられるが，このことは今後の検討課題として残された。これらに共通することは，イメージの"曖昧さ"ということであろう。想起時における主観的体験により接近するためには，曖昧なイメージそのものに沿う，という観点から検討することが必要である。このとき，本研究のような数量的なアプローチではなく，たとえば描画や箱庭を使って表現してもらい，といったようなより個別的な観点からの質的なアプローチを行うことが一つとして提案できるであろう。

次に，本研究結果から，同じ視点での出来事が連想されやすいということがわかったが，本論で考察した観点以外にも，個人における体験様式や自我水準などの個別的な観点からも考察されることで，この現象をより多角的に捉えることができると思われる。今後，たとえばロールシャッハテストのような投影テストとのバッテリーを組んで，そうした観点から検討することが望まれる。

### 展望

冒頭で述べたように幼児期記憶が心理臨床場面で扱われていることを考慮したときに，本研究での知見がそこに寄与出来る余地があるであろう。すなわち，面接において幼児期記憶を扱う際に，単に記憶を想起してもらいだけでなく，その情景における視点をも語ってもらい意義を見出せたと言える。たとえば，幼児期記憶において内的視点で想起された出来事は外的視点の出来事と比べ，より不快感・恐怖感・鮮明性をともなうなどの傾向が見られたということは，そこで語られた幼児期記憶を理解する際に役に立つと思われ，その理解を深めることができるであろう。ただし，本研究の結果は質問紙というツールを用いて得られた結果であり，安易に実践場面で利用されるべきではない。心理臨床場面では実際にいかにして現れるのか，"視点"とはどのように体験されているものなのか，という観点からも検討されることが望まれる。

付記 本論文は京都大学教育学研究科に提出した卒業論文の一部を加筆修正したものである。調

査にご協力くださいました皆様，論文作成にあたりご指導くださいました桑原知子先生，楠見孝先生，齊藤智先生，伊藤良子先生に心から感謝申し上げます。

注 予備調査において，“幼児期とはいつをさすのか？”という質問が少なからず見られた。そこで本調査では，被験者それぞれにとっての幼児期を定義してもらい，その時期を“幼児期”として扱うこととした。なお，開始時期については被験者間で差が見られたが（0歳から4歳），終結時期はほぼ一致した（6歳，小学校入学前，幼稚園卒業まで，など）。

#### 引用文献

- Adler, A. (1932). *What Life Should Mean to You*. London : Unwin Books. pp.56-71.
- Freud, S. (1899). *Über Deckerinnerungen*.  
(小此木啓吾 (訳) (1970). 隠蔽記憶について フロイト著作集第6巻 人文書院 pp.18-35.)
- 林和歌子 (2005). 幼児期記憶を再構成する語りの一分析例 ——記憶イメージと感情体験を探る——九州大学心理学研究, 6, 149-157.
- McIsaac, H. K., & Eich, E. (2004). Vantage point in traumatic memory. *Psychological Science*, 15, 248-253.
- 森津太子 (2003). 幼児期健忘と最初期記憶に関する現在の研究 甲南女子大学研究紀要 人間科学編, 39, 19-25.
- Murray H. A. (1938). Autobiography. In H. A. Murray (Ed.), *Explorations in personality : A clinical and experimental study of fifty men of college age*. New York: Oxford University Press. pp. 412-420.
- Nigro, G., & Neisser, U. (1983). Point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, 15, 467-482.
- 越智啓太 (2003). 自伝的記憶想起における「視点」の問題 第45回日本教育心理学会発表論文集, 711.
- 大矢大 (1999). 心因健忘 松下正明 (総編集) 臨床精神医学講座S2 記憶の臨床 中山書店 pp.357-393.
- 齊藤恵一・大場久美子・岩本隆茂 (2001). 記憶想起の際の視点に対する自己注目の効果 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 8, 23-29.
- 佐藤浩一 (2002). 自伝的記憶の構造 群馬大学教育学部紀要, 51, 337-353.
- 佐藤浩一・野村信威・遠藤由美・太田信夫・越智啓太・下島裕美 (2006). 自伝的記憶研究の理論と方法 (3) 日本認知科学会 テクニカルレポート, 57, 1.
- 杉浦健 (1996). 自己イメージの内的・外的視点に対する自己意識の影響について 心理学研究, 66, 418-424.
- 山中康裕 (2001). 初回面接において目指すもの 臨床心理学, 1, 291-297.

(心理臨床学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

## Point of View in Early Memories and Its Associated Memories

MORITA Kenichi

In recalling a memory, two perspectives are possible. In any given scene, we may see ourselves from our own perspective (internal viewpoint) or from another's perspective (external viewpoint). This study investigated perspectives in early and associated memories. One hundred and sixteen students participated individually. They were asked to fill in a questionnaire and post it in a box. The results showed that early memories were more likely to be recalled from an external viewpoint; memories recalled from external viewpoints were highly objective and pleasurable, while memories recalled from internal viewpoints were vivid, frightening, and unpleasant. For associated memories, more events were recalled from internal viewpoints. Moreover, there was a pattern with respect to association. Early memories recalled from external viewpoints were more likely to be associated with memories recalled from external viewpoints, while early memories recalled from internal viewpoints were more likely to be associated with memories recalled from internal viewpoints. The former pattern was more likely to involve early events, while the latter pattern more often involved recalled events from the primary school period.